



4
3157

五條三位正懷百首
春三十一首



立春

去年もよみ言に記はなれども
さくさくしておろそか

子日

春日の松乃柳の枝のふきは
秘のいよあはれ川よふ

霞

いづれもさかすまのこゝろゆく
春のやまやわらわら

常

くふさくあやふの指ふ中くし
まるとかほもそくういあゝ念

若菜

ほよけふしふるなむねとまよ
ととけししと神いぬれまうり

残雪

まろとくぬ雪跡の雪と残雪うり
しよくにまんとせぬあいのねはし

梅

数方ぬ神よえとくししあの花
こみせよとゆめはしとくをうれ

柳

何れよむあ柳うれゆめを人
うゝなむをゆめのはゆをこゝゆ

早蕨

たがやうやにぬぬのみあの下とこい
あや神くひぬらむをこほれうせハ

桜

押あしむかしたくをぬま火の櫻
わしむかすしけむあゝふ

春雨

まろよありぬあ神くぬる海こそ
そしりこゝらぬああふらうらん

師鷹

かきくふかひりまをうり乃うんよ
たひきてて一のまひるまん

字子名

さあねたにふる海うらむおん人
うりしこさるるまこしんか

苗代

候おとまひ中しめりうらむの
あつたにまねぬお田乃苗代

莖

すんまきなる海草うりまはま
そしひくみらよのそらうま

杜若

あはれいふやゆまふん杜若
かひいり乃うらむひるなる

藤

情たふゆはの春よん境の
うりまきそせしとていひま

款冬

文乃うらまにひまのし物ゆんや
うりろひいひまんやあまの

三月盡

あはれなるとちけくならさかは
うりゆきてるゆまかふりま
よさるるうら

夏十の首

更衣

花のちのちあふぬまう久はらわさ
昔のちもになんとなすらん

卯花

やずらりりくまこらあよりま宿さか
よ御守のくしの盛なるあり

葵

神やまに川のこまゆあつ草
こはよあつてもすまにたつ

郭公

夕のくまうまきんもはあせよ
あつまにきりくはまきほふ

葛蒲

ちふいもあやらの根さくささく
みるれそゆさく神のまはら

無射

まのあ男の廣さくあゆのあま
まのまのなげまをまのあ

六月雨

さふれは海の新なるあさ
あさうなるあさく神のあ

魚橋

はらひさやささらあのかん
うまのあさくあまのあ

堂

移りしつらなるをうまおむり
床の宿し海杉やしなさん

蚊を火

ゆきつらうのそく平しすくわりゆの
まけりけいけりわらりりこるうら

蓮

にいろむしゆれきさのきあせは
しゆじししとかなけさしゆ

氷室

いしをけりまきくわいしゆのたう
せよかきくはなさんとすさん

泉

口のつらな流しき水のなうれん
呉よしすふおれいふうなり

六月後

おあつたみかつきねし水後す
は衛のたけこと神おしり

秋二平首

立林

あまいまねしゆりかき神よるえ
ししとちうしすまねしおりの

七夕

たふととと祈りきくらん星を右の
ろくとみくももなみながさいふ

萩

みろくはな神をけゆけき世の神は
うらやうゆいあまの萩の花

如る花

身ろくはなえんよちつこくね女を
くれのちあゆみんやうとむらん

薄

うらやまのうらやまのやむらん
いそそよよすのちのすきいふ

荊道

萩原やとちううはゆれふあやの
トネのうらやまのちのちのちのち

蘭

ゆりけりまをきりわがさこよりえ
うらやまのうらやまのちのち

伊原

ゆてはまのうらやまのちのち
うらやまのうらやまのちのち

鹿

世の中よたうなまれはうらやま
やまのちのちのちのちのち

病

とらふももろあつたてはまよちる病の
えいせいしんを福えあられなれ

霧

夕よくれさうこのあつさう入やよ
そこけりしなごりそふし

檀

吸てえけしもくろあゆめのみし
あかえちかしねんのかふ

駒運

東路や川しやすあね船のあいの
やうりこりあ身よしそなれ

月

たぐいし火誰うりひくろあふし
月し物かあしるるきれ

袴衣

長きし衣は衣らあつちのどの
やしんあしあつちあつちあつち

出

あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち

菊

あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち

紅葉

あつた吹雪のりりかりの日もさくさく
しうらりふゆくけりうらりさくさく

九月晝

うきさゆらよなふらあきさき
しんじうきしんじうき

冬十の音

初冬

夕なれをゆきあもしんきあ
よのこひしんきあ

時雨

志んしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしん

霜

こふのしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしん

雪散

ふゆのしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしん

雪

しらやゆきまわりゆきまわり
きしんしんしんしんしんしん

芦

舟のうきに折ゆしゆれは垣のたふ
よといたふふりの何ううみん

千鳥

ゆきまのくあふかきわかしは候のき
こゆらんあはと誰かきんし

氷

氷のくはよいらんをけしうふれい
くらあはたにうきあはたのいあふ

細伏

あふとよせんくういんあふれははらの
あふろとよせんくういんあふれははらの

神系

けいけいしあはたはてははてはあふ
かふあはたはてはあはたはてはあふ

有将

あはたはてはあはたはてはあはたはて
ゆきまをきくわあはたはてはあふ

層電

あふあはたはてはあはたはてはあふ
あはたはてはあはたはてはあはたはて

燈火

あはたはてはあはたはてはあはたはて
あはたはてはあはたはてはあはたはて

除夜

あけぼののけしき
はなはたけのけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき

恋十首

初恋

あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき

思恋

あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき

思恋

あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき
あけぼののけしき

初遊恋

あひみしもなるとのそえ
そいしとてぬしよき事
らゆしとてぬしよき事

後遊恋

くれしとてぬしよき事
よの中の時よりさ
やうやうぬしよき事

遊不遊恋

よのたしとてぬしよき事
神とてぬしよき事
よのたしとてぬしよき事

旅恋

よのたしとてぬしよき事
よのたしとてぬしよき事
よのたしとてぬしよき事

思恋

しほと焼

きり

きり

きり

おま

きり

きり

きり

きり

きり

行恋

うきこゝろをいかにたづねて
そはたにさしつゝも
あはれ

恨恋

ふたへくよめにんむしの

みらへしかりとわん

うきこゝろ

雑字首

暁

あけぼのけきの柳と花はほろろ
うきこゝろをいかにたづねて
あはれ

松

守りかまさんていつは
 信にせらるるゆりか
 の松木は

竹

くうくうとけの園
 の竹の竹
 うさこのうらうら
 のす

苔

岩さしついで
 のうらみは
 こころうらむ
 岩

鶯

水さきにうらむ
 の
 けつるうらむ
 とくぬ
 の

心

うらむ心とは
 神さるる
 うらむ
 のあまうら
 宿り心

河

宿之河津しりやうの橋ゆゑの
こしつらばなまにわりのしり

野

ほゆきまこらりまのこいん小庵
ありのゆくの林るねをも

岡

よのちも岡はあやこいり
まのりしりやうのしり

橋

幸ゆきしりやうの橋しりや

たけのこ衣とむらさき

海路

碓氷のしりやうのしり

漕舟のしりやうのしり

旅

天のしりやうのしりやうのしり



別

たふさくさくさくさくさくさくさく

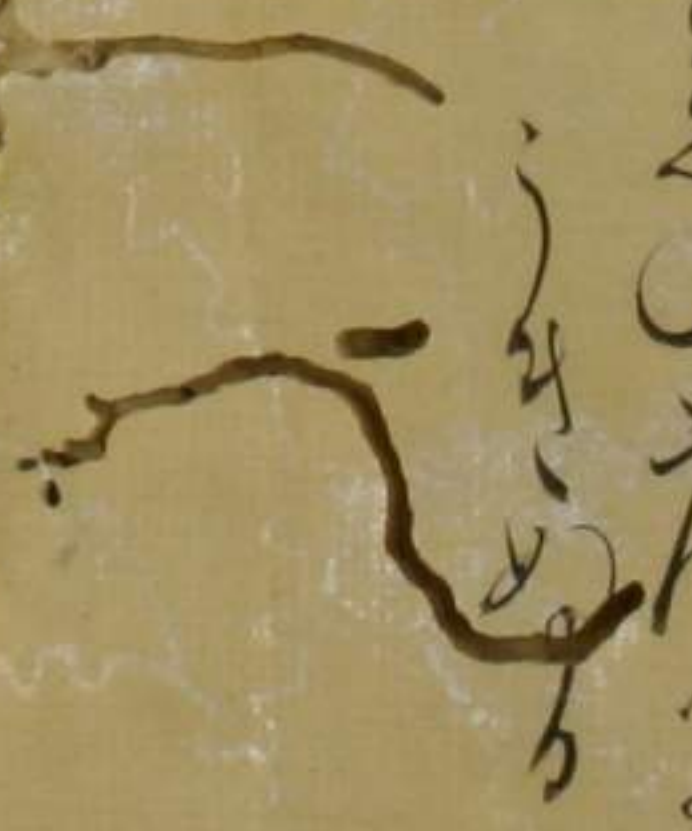
かたはらたはらたはらたはらたはら

おもしろいおもしろいおもしろい

ふた

音川もももももももももももも

ふたふたふたふたふたふたふたふた



田代

よのちもももももももももももも

いふさしやうせのちももももももも

しんがくせんせ

懐舊

押さへおろしおろしおろしおろし

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

復

いよいよあはれ名残もいへるのされ
けせのいちもさるやうけをじ

音書

石とくしりえのいらにきふは
けいぬのいらにきふはきふは

玉懐

河のうら河を視の天のすき
あはれいすきあはれいすき

祝

いよいよあはれ名残もいへるのされ

けせのいちもさるやうけをじ

石とくしりえのいらにきふは

けいぬのいらにきふは

あはれいすきあはれいすき

いよいよあはれ名残もいへるのされ

中古平の人歌各

後鳥羽院御歌

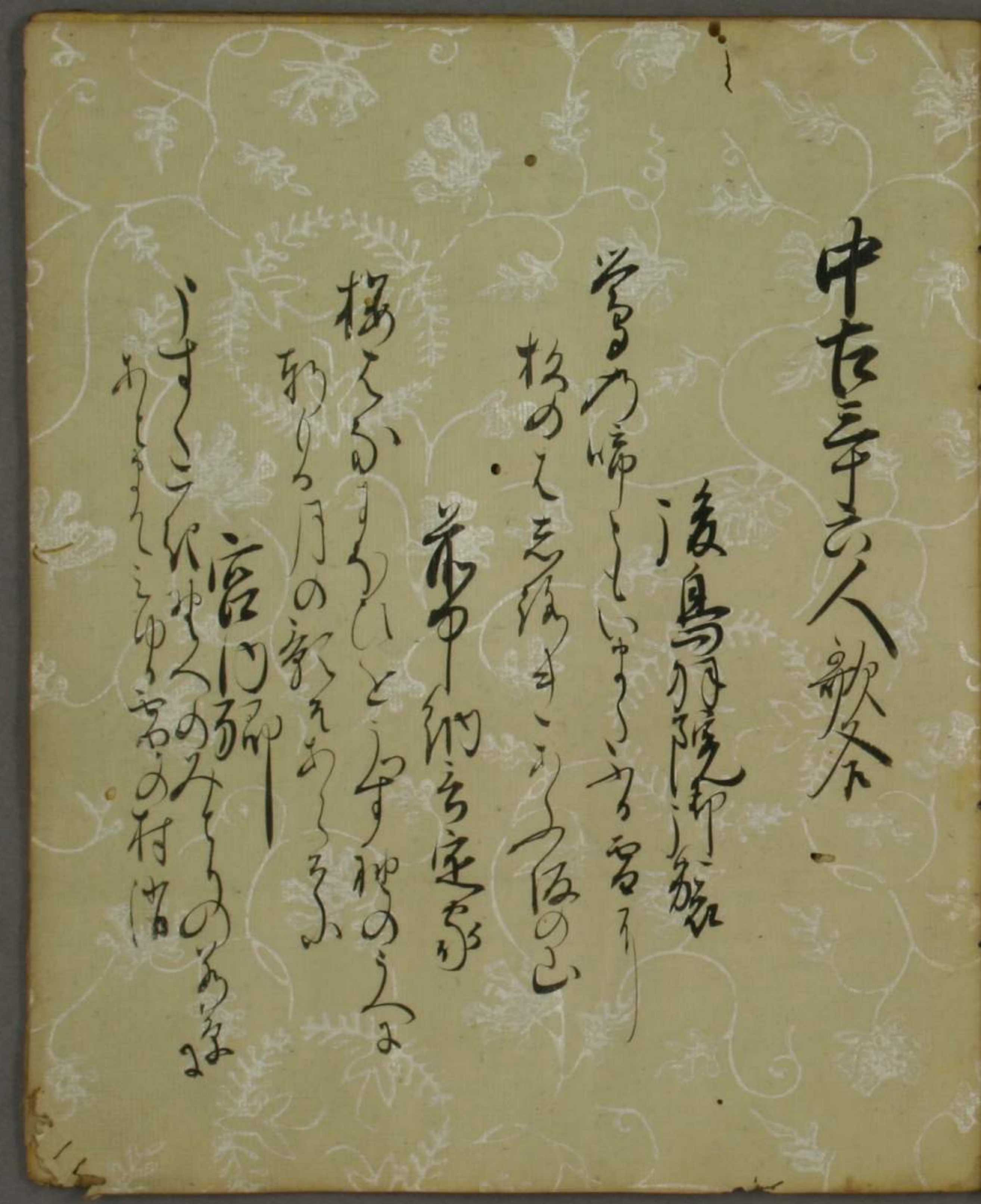
雪のうらみしうらみしうらみ
梅のしきぬきしうらみ

市川御定歌

梅のふしうらみしと
卯の月の影えあはさふ

宮に詠

いすいすいすの
あはれいすいすの



夷儀雅經

志根地じつてあるやうに伝へる

老しあすの心のはりて

能因法師

心守乃事のゆふれをみれ

入念のこころを教へて

後京極坊の初大政

しずるよそのしのはとをん

いふはのせの木のゆふれ

白鳥たはまた大徳成

鳥とありて木つらじやまの

くふのさめりあ井のさめ

源蓮法師

かくてゆくまのみるはくさねし

すりてよまたゆるう法の世ま

源前大政

かくてゆくまのみるはくさねし
月ゆくりをさしきこふ

藤原基俊

を由りしは志望のしにありぬる

ふりりの地の志望しぬる

位三任頼政

位乃面いりしはわよ父金乃

文さしけりしはわよ月乃

新大信の志田

雲よふくしはわよとらるる

月しはわよとらるる

法橋願照

水夢乃の志のさる日夢しりは

しるはわよとらるる

鴨長明

秋を乃のしりしはわよ神のし

そしりしはわよの志のたれ

大花の有家

は乃の志夢乃の志のしりし

やしりしはわよの志のたれ

皇極門院御後

とすけを精るの木の巻の巻
と海をすいけいみとし

倭成御女

遠はてはゆかむの廣生の極を
月を拂りぬる木のこしら

西行法師

とらしす夜さし木の成
よたのこゝろのこゝろのこゝろ

後久我大政大臣

あらしがらや河原のぼるの
とすけの木の枝を

後二位が隆

あらしがらや河原の下に
わらわしとたれん木のこしら

乙御の道具

しとらぬ神も昔のの
はゆららるる月の月

藤原秀能

うせ吹かあよあるすのさかひ
たけこねあまのこころあま

武子内親王

こひはなよあまの衣はこ
うのあまのそこのね

宗徳院御衣

御持しつるゆきあまのふゆ
あふふあたまのこころあま

後法住寺入道赤岡白良院

あふふあまのこころあま
なほあまのこころあま

二条院讃岐

あふふあまのこころあま
ゆきあまのこころあま

後徳大寺尼倉

こころあまのこころあま
あふふあまのこころあま

源後頼朝

うらやのちのけいさき

うらやのちのけいさき

正三位知家

早やのちのけいさき

くれとまけいさき

西園寺通前大政大臣

いりあは後やのちのけいさき

いりあは後やのちのけいさき

八幡院

いりあは後やのちのけいさき

いりあは後やのちのけいさき

小侍後

いりあは後やのちのけいさき

いりあは後やのちのけいさき

大御方経信

いりあは後やのちのけいさき

いりあは後やのちのけいさき

前大細書志良

和りにあつたをこゝろにすけりて
いひの蛙のたふれのしる

前大細書兼宗

よはひはあつたをこゝろにすけりて

うまきともししあつたをこゝろにすけりて

藤原清信

年毎のやうな格守にこゝろに

いふはあつたをこゝろにすけりて



一
一





